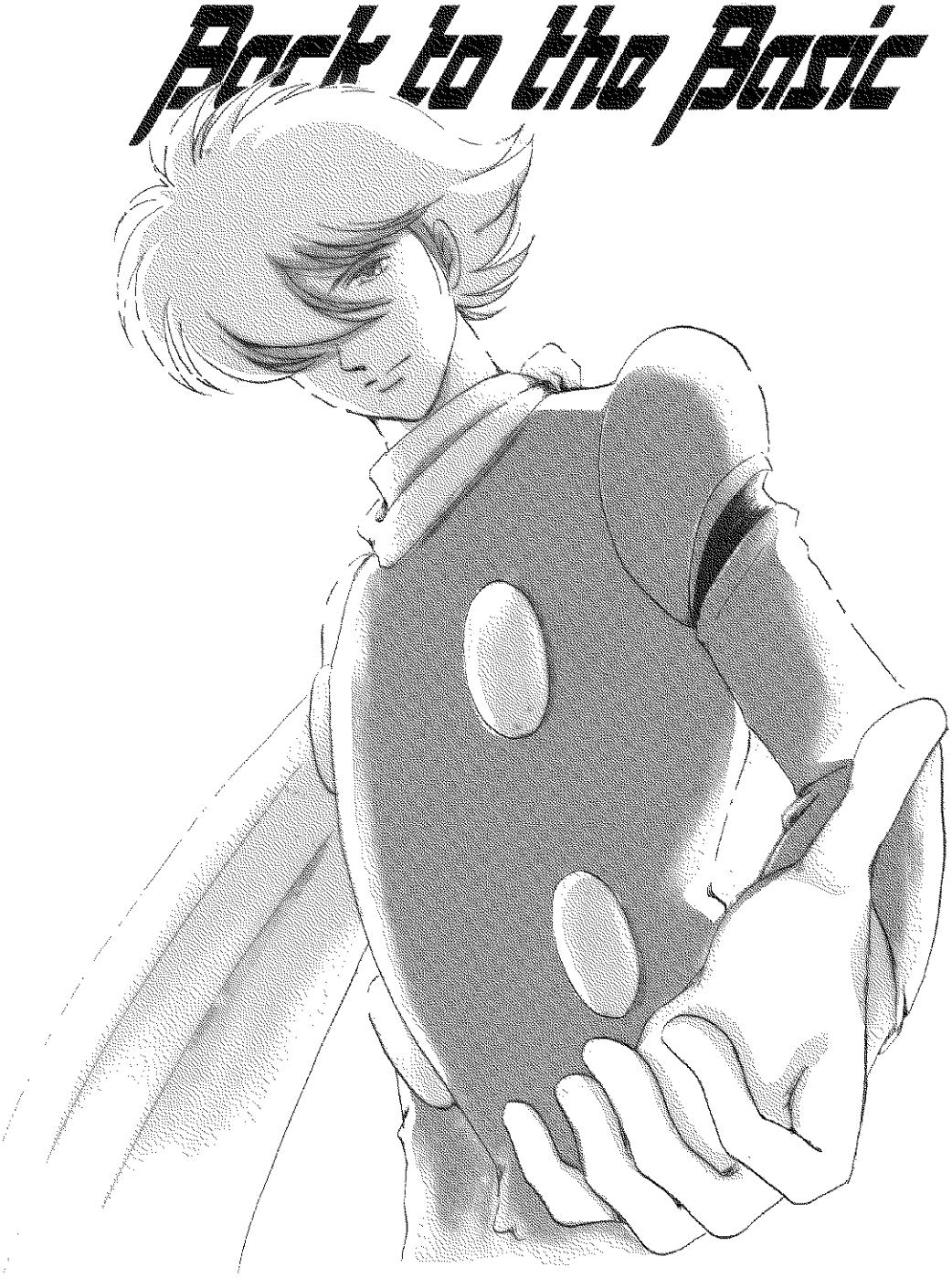
Back to the Basic



CONTENTS

Story	群　青	*by miyako* /3
Illustration		*by i-ma* / 55
Comic	後日談	*by i-ma* / 56
Illustration		*by i-ma* /58
Comic	ぬくもり	*by i-ma* /59
Column	やっぱりジョーが好き	*by i-ma* /63
Comic	４コマシアター	*by i-ma* /64
Illustration		*by i-ma* /67
Story	ローマの休日	*by miyako* /68
Illustration		*by i-ma* /83
Comic	009誕生	*by i-ma* /84
	人質交換	*by i-ma* /85
	とりあえず言ってみた	*by i-ma* /86
Illustration		*by i-ma* /87
Story	スウィート・キャンディ	*by miyako* /88
Illustration		*by i-ma* /93
Comic	後日談２	*by i-ma* /94
あとがき		/95

群　青

プロローグ

昼前からたちこめていた重い灰色の雲と冷たい雨が嘘のように晴れ、太陽の光が眩く射し込む窓辺に彼は立っていた。地面を覆っていた影はみるみるうちに陽に照らされ、濡れた地面が徐々に乾いていく。

眺める彼の頬に謎めいた微笑が浮かんだ。

「ジョー、どうかしたの？」

「……いや」

軽いスリッパの音を立ててフランソワーズが近づいて来ると、彼に並んで窓辺に立ち外を眺めた。

「晴れたわね。さっきまでのどんよりした空が信じられないわ」

「そうだね…。きれいさっぱり霧も晴れた」

くっくっと笑う彼をフランソワーズは不思議そうに見つめた。

ジョーはガラス越しに空を見上げ、眩しそうに目を細めるとレースのカーテンを閉めてフランソワーズに向き直った。

「たまには出かけないかい？　どうせみんな夜まで戻らないんだし」

彼女の顔が輝いた。

……キヲ…ツケテ……

目ヲ…覚マセ！　早ク……

００９は飛び起きた。

頭が霞掛かっている。嫌な汗と予感が背中に走ったが、今の夢を思い返そうとしても苛立たしいほどに全く思い出せなかった。

せめて夢の片鱗でもと全意識を集中するが、蘇るのは今も残るこの嫌な感じだけであり、それは初めてではなくかつて過去に経験した感覚に似ていた。自分が取り残されるような焦燥感と動けない絶望感。

「なんて顔してんだよ、００９」

「やあ、おはよう、００２」

「悪い夢でも見たのかよ、ガキみてえだな」

「まさにその通りなんだ。参ったね」

００９は苦笑して椅子に座った。
テーブルには既に朝食の皿が並べられ、淹れたてのコーヒーがポットから湯気を出している。いたって日常的な朝の光景……それが何かいつもと違うもののように見えて、００９は慌てて首を振り不愉快な思いを捨て去ろうとした。
「ありきたりだけどさ」
００９の隣に座っていた００８が声をかけてきた。
「嫌な夢は話した方がいいっていうよ」
「実は思い出せないんだ」
その言葉に呆れたように００２と００８が顔を見合わせた。思い出せもしない夢がどうして嫌な夢になれようか。
「思い出せないんだけど……あの感じ、ものすごく嫌な後味が、昔よく見た夢に似てるんだ。もしかしたらまたあの夢を見てたのかもしれない」
「どんな夢なの？」
焼きたてのスクランブルエッグとウィンナーを一人一人にとりわけながら、００３がちらりと００９を見た。００９は少し照れたように頭を掻き笑った。
「バカみたいな夢さ。ずっと昔の……そう、ＢＧ（ブラック・ゴースト）に改造されたばかりの頃によく見てたっけ」
「改造された頃？」
「そうなんだ。僕は目を覚ます……その時はまだ自分の身に何が起こったかわかってないんだが、僕の目の前にもう一人の僕が同じ防護服を着て立ってるんだ。僕は金縛りにあったように動けない。ソイツはニヤッと笑ってあの手術室を出て行くんだ。『待ってくれ』と叫んでも声が出ないし動けない。ひとり置き去りにされ誰からも忘れられて僕はもう終わりだと、なぜだかわからないけど絶望してそう思う、そんな夢だったな」
わけがわからないといった様子で００２は大げさに両手を上げて首を振った。彼の反応を予想していたのか００９は苦笑する。それまで黙っていた００４が口を開いた。
「昔そんな夢を見たのは、おそらくお前の深層心理が生身の軽い身体に逃げられた重い機械の自分を悲しんだとでも説明すべきかね。だが今になって思い出すとはな。あれから何年だ……もう十年近いじゃないか」
００４の言葉に００２がウンザリした様子で乱暴に答える。
「こんな島で隠れるように暮らして十年か……いいんだか悪いんだかな」

「そんな言い方をするものじゃないわ。島国だから目立たなくて助かるんじゃないの。この国の人たちはあまり余計な干渉をしないようだし」
「奴らの目がどこに光ってるかわからない。おとなしくしてるに限るよ、００２」
「なあに、じきに『時効』も来るだろうさ。暴れたきゃ暴れろよ」
皮肉っぽく言い放つ００４を００２は睨み付けた。
００９は彼らの話を聞いているのかいないのか、物憂げな表情で何やら考えていたところを、００３に脇からつつかれて我に返った。
「ねえ、コーヒーにミルクは入れるの、００９？」
「あ、ああ、ありがとう。今日はいらない」
「何を考えてたの？　夢が気になる？」
「いや…。あ、そうだ、今朝誰か僕を起こしに来てくれたのかな？」
「いいえ、私は知らないわ」
「誰か来ただろう？　確か、そうだ、こう言ったんだ。『気をつけて、早く目を覚ませ』だったかな……そんな感じ」
００９の言葉に周りの雑談が一斉にピタリと止む。誰もが彼に注目し、次の言葉に耳をそばだてているが００９はそんな雰囲気の変化に全く気づかない。
００３の持つコーヒーポットがカタカタと震えて揺れた。００４は黙ったまま彼女の手からポットを受け取り、隣の椅子を指して彼女を座らせた。
首を捻りながら００９は言葉を続けていた。
「……丁度悪夢と連動してたのかな。うまいタイミングで『気をつけて』とか『目を覚ませ』とか言ってもらってよかったよ。誰だったんだ？」
一瞬の沈黙が広がった。
００９の問うような眼差しに誰も答えられない。
「……早く食おうぜ。卵もコーヒーも冷めるんじゃないかって００３が心配顔だ」
「そうだな。それに、誰もお前を起こしになんて行かないぜ。用事もないしな…。それも夢の一部なんじゃねえの？」
「そっか、そうかな」
そして、不毛な会話に終止符を打つのはいつも００４の役割だった。
「また気になる夢でも見たら言ってみろ。何かを暗示しているのなら、案外本人じゃない方が客観的に見てよくわかるかもしれん」

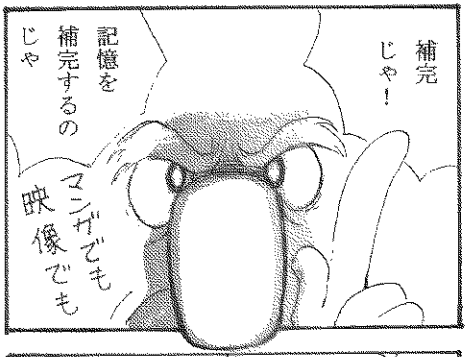
それ以後、連日のように００９は夢にうなされて起きるようになった。
決まって心身に残る嫌な感覚と耳に残る『キヲツケテ』の声。今ではそれが仲間が起こしに来てくれる声ではなく、悪夢の中の声だと００９にもわかってはいたが、目覚めた直後は頭の中にはっきりとリフレインしているほどのリアリティがあった。
睡眠薬を飲んでも夢を見ずに眠れることはなく、ついに００９は諦めてそれならいっそ夢を全て積極的に受け入れ体験してやろうと心に決める。目覚めた時に夢の記憶もこちら側に持って来られれば、もう気になることもないはずだった。
そして、ついに夢の中の声がはっきりと彼に語りかけるようになる。
『ヤァ、ヤットボクノ話ヲチャント聞ク気ニナッタンダネ、００９。ボクハ００１ダヨ。君ガ気ヅイテクレルノヲズット待ッテタ』
（００１だって……？）
『ソウダヨ。イイカイ、００９、今カラボクガ言ウコトヲヨク聞クンダ……』
悪夢の影は形を取って現実に動き始めた。

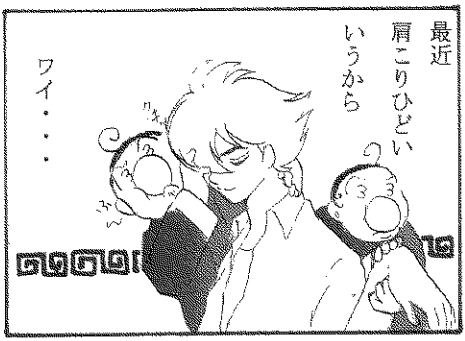
1. 接触

その日、００９は早朝ふらりと外へ出た。
リビングにもキッチンにも誰もいない時間を狙って出たのだろうが、その姿はしっかりと００３に見咎められていた。
彼女は私室にいた。小道を下っていく００９の後ろ姿をベッドの端に座ったまま、その能力で追いかけ見送る。
途中で００９はふと立ち止まり、振り返って研究所を見上げた。静まり返った朝の研究所は霧に包まれ、窓もカーテンも全て閉ざされて無人のようにすら見える。再び視線を前方に戻すと彼は小走りに駆け出した。
００３はゆっくりとベッドから立ち上がり窓辺に歩み寄った。白いレースのカーテン越しに００９が走り去った方向をしばし見つめ、やがてきびすを返し部屋から出た。
数分後、００９を除いたメンバーが全員リビングに集まった。
「で、ヤツは当分帰って来ないんだな？」
「そうね。いま三十キロ離れた雑木林の中にいるわ。

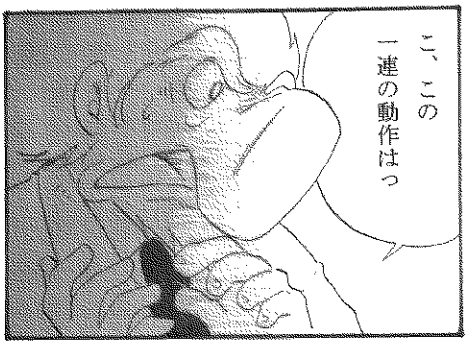
座り込んで何か考えてるみたい」
「もっとも帰って来る時や、その気になれば加速で瞬時だろ」
「……その通りだ」
　００４は短くそう答えると、目の前のコーヒーを一口含み、問うようなまなざしを００３に向けた。
「みんなにも話してくれ。ヤツが言ったことを思い出せる限り詳しく頼むぞ。あの悪夢の話はみんなも気になっていただろうし、００９のヤツはその後だんまりときてる」
　００３に全員の注目が集まった。彼女は首を少しかしげるようにして考えながら言った。
『悪夢は続いてるの？』って声をかけたのよ、夕べ食事が終わった頃だったわ。そうしたら、驚いたように私を見て…。で、突然００１のことを聞いてきたの」
「００１のことを？」
「なんて？」
「それが……何を聞きたいのかさっぱりわからないの。『００１って…』と言いかけたまま、顔を逸らして逃げるように去って行ってしまったの」
「それだけかよ？」
「ええ」
「なあんだ、そんなんじゃサッパリわかんねえよ」
　００２が納得いかない様子で食ってかかるのを００４が制した。
「待て、わからないのはみんな同じだ。ただ、突然ヤツの様子が変わったこと、そして００３に００１のことを何か言いたげだったこと、材料としては……」
「うん、僕も危険だと思うね」
　００８が静かに言った。彼の言葉を受けてか００５が重厚な一言を発する。
「時が来た」
　誰もがその言葉にもっとも考えたくなかった可能性を思い知らされていた。いずれその時が来ると最初から知りながらも、近頃ではそれが幻想であるかのように意識の奥底にしまいこまれていたのである。
　声にならないため息がリビングに広がった。重苦しい空気を振り払うように、００３がわざと明るい声を出した。
「でも私たちには何も連絡がないじゃないの。ただの夢だわ」
「そう言い切れるのか？　変だと思ったから君だって俺にそのことを話したんだろう。時が来たと思ったからこそ…」

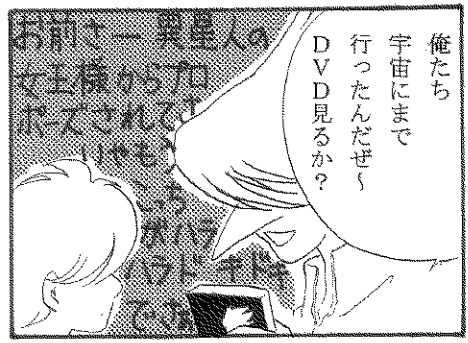
た、大変アル ジョーが 記憶喪失に なったアル～
な 何じゃと？ 一体 どうしたん じゃ？

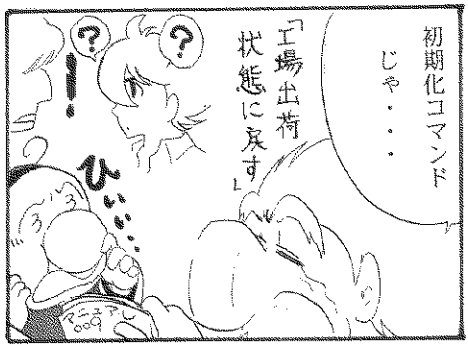

補完 じゃ！
記憶を 補完するの じゃ
マンガでも 映像でも

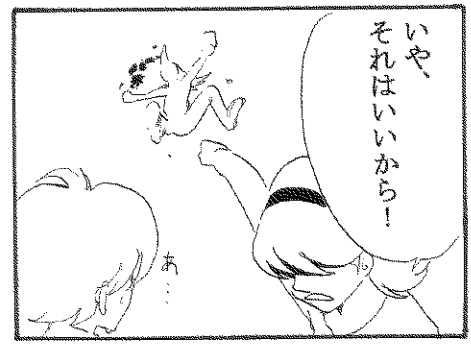

最近 肩こりひどい いうから
ワイ・・・

ジョー
ワイの本 貸すよろし
何事も 基本は 大事アル
SF COMICS


こ、この 一連の動作はっ


俺たち 宇宙にまで 行ったんだぜ～ DVD見るか？
お前さー 異星人の 女王様から四 ポーズされて いやもう 大パニック ハウドキドキ ですよ


初期化コマンド じゃ・・・
「工場出荷 状態に戻す」
？
？
！
ひぃぃ・・・


いや、 それはいいから！
あ・・・